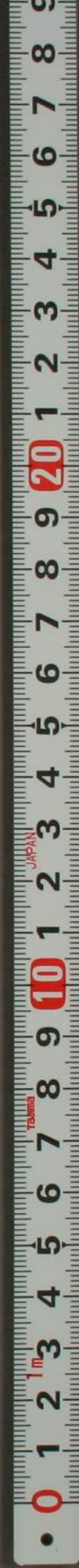


蘭 和

窮理外科則

七創部爛傷部
卷之中
篇打撲部

ヤ 4
1427
2



174
147
2

窮理外科則卷之中

目次

創部

第一章

臍創ヲ論ス

第二章

神經創ヲ論ス

第三章

頭創ヲ論ス

第四章

胸創ヲ論ス

第五章

胸創ノ證候ヲ論ス

第六章

胸膜マテ貫ク創ヲ論ス

第七章

治法ヲ論ス



第八章

内ニ貫ク創ヲ論ス

第九章

證候ヲ論ス

第十章

治法ヲ論ス

第十一章

腹創ヲ論ス

第十二章

内ニ貫ク不貫創ヲ論ス

第十三章

内ニ貫ク小創ヲ論ス

第十四章

内ニ貫ク大創ヲ論ス

第十五章

脱腸ヲ論ス

第十六章

納腸ニ難キ創ヲ論ス

第十七章

脱腸網ヲ論ス

第十八章

臟腑ノ創ヲ論ス

第十九章

問答篇

爛傷部

第一章

爛傷ヲ論ス

第二章

摩盪ヨリ起ルヲ論ス

第三章

治法ヲ論ス

第四章

外蝕ヨリ起ル者ヲ論ス

第五章

内蝕ヨリ起ル者ヲ論ス

第六章

死肉ヨリ發スル者ヲ論ス

打撲部

第一章 打撲ヲ論ス

第二章 打撲ノ證候ヲ論ス

第三章 患部ニ隨テ其證候異ルヲ論ス

第四章 打撲ヲ診視スルヲ論ス

第五章 治法ヲ論ス

第六章 打撲ノ膿潰スル者ヲ論ス

第七章 打撲ノ脱疽ニ變スルヲ論ス

第八章 問答篇

窮理外科則卷之中目次終



窮理外科則卷之中

第七篇 遠西政曆一千七百六十二年鑄行

遠西 和蘭

窮理大醫學 育漢涅斯趙爾德兒著 以刺

蘭詞

大日本丹後重處士

新宮涼庭碩

重譯

陸奥菅玄龍以貞

日向甲斐文貞國幹輯録

尾張永田良達有定

割部

第一章 臍割ヲ論ス

若臍ヲ横斷スル片ハ必其部不仁メ運動屈伸ノ用悉ク廢

ス、何者、臍割ハ再愈着シ難ケレバ也、然、凡醫勉テ之ヲ愈着
セシメザレバ耻ナルガ故ニ左ノ箇條ニ意ヲ注ヒテ治ス
ベシ、

第一、此割ハ宜ク枕縫術ヲ施スベシ、

第二、臍ハ緊縮ノ性アリ故ニ之ヲ縫ニ當テ唯其割口相
合スル而已ニテハ終ニ相退離テ愈着スルヲナシ、凡ソ
鶯管徑モ相重ナル程ニヨセ合セ縫ベシ、

第三、鍼ヲ刺ハ割口ヲ距ル一小指徑ノ處ニ於テ直ニ一
方ノ外表ヨリ裏ニ向テ刺、臍臍共ニ貫イテ一方ノ表ニ
通過セシムベシ、



第四、臍臍俱ニ附着スルヲ要スベシ、

第五、臍若緊縮メ臍延長シタル者ハ、臍ヲ剪去テ恰好ナ
ラシメ、劫恣ヲ加ヘテ縫ベシ、如此セザレバ臍臍共ニ愈
着スルヲ能ハズ、

第六、臍ノ緊縮シタル者ハ須ク摘毛ヲ以テ臍ノ割端ヲ
抽出シ、然メ臍臍俱ニ附着セシメンガ為ニ、控伸シ臍ト
共ニ鍼ヲ貫キ縫合スベシ、

第七、總テ鍼ヲ刺時ニ方テハ、其切口ヲ相合センガ為ニ、
患者ヲメ其部ニカヲ用ヒシムベカラズ、又術ヲ施メ後
ハ其部ヲ動サシムベカラズ、

第八、凡、創ヲ受テ後甚時刻ヲ移シタル者ハ、創端舊テ愈著シ難シ、如此者ハ未縫ザル前ニ利鉞ヲ以テ其創端ヲ稍剪去リ、而後縫術ヲ施スコアリ、

第九、鍼ハ圓クメ曲者ヲ良トス、常ニ鍼室ニ納備ベシ、第十、創上ニハ創脂、或、神經創脂ヲ撰ヒ敷ベシ、

第一神經創脂

管子八一嚇

歌一柳

底力面油 各四

右混和供用

治療ヲ施シテ後、創處ニ小核殘テ甚夕突起セザル片ハ、臑愈著ノ候トス、

第二章 神經創ヲ論ス

神經創ハ最モ危篤ノ創トス、何者、神經ヲ全ク切斷スル片ハ再愈著スルコト無ク、隨テ其部麻痺スレバ也、○若、神經ヲ創傷シテ創脂ヲ處セザル片ハ、或破傷風ヲ發スル者也、

第三章 頭創ヲ論ス

唯頭ノ層腓而已ヲ傷タル創ハ、他處ノ創ニ比スレバ速ニ愈易シトス、然、凡、鈍器ヲ以テ強ク打撲スル片ハ間亦腦髓劈驚メ危篤ニ至ルコトアリ、○蓋シ頭創ノ内部ニ及ヤ、否ヤヲ知ルニハ、

第一、其器ノ觸タル勢ヲ察シ、

第二年齡ノ多少ヲ論シ、老者腦蓋堅枯也、故其易為劈痕可以見矣

第三、創ノ形狀、及其變證ヲ以テ知り、

第四、創、腦蓋ヲ貫イテ腦モ共ニ毀傷シタル者ハ、挿器ヲ以テ探り知ヘシ、

第四章 胸創ヲ論ス

若、胸創、全ク内部マデ不貫者ハ、必肋、與肋膜ノ間ニ汚血風氣溜テ腫起ヲ發ス、是ヲ以テ此創ニハ撒糸ヲ挿テ其口ヲ速ニ愈着セシメズ、唯縛帶ヲ以テ緊縛抱持シ、氣腫ヲ發スルニ所在無ラシムベシ、然レ疝間亦縛術ヲ處スルヲ無メ、唯其吸氣ニ連テ創ヨリ風氣ノ襲入サル様ニ、或膜ヲ以テ

創口ヲ被覆スルコトアリ、長崎在館、甲長渡富曰、我國方鑱金時其鑱上得薄膜、收貯以被創、則創愈最速也、或以豚之膀胱、被之亦可也、譯者按、言膜者、恐此類也、

第五章 胸創ノ證候ヲ論ス

胸創内部ニ及ブカ、然ラザルカヲ知ニハ、

第一、其觸傷リタル所ノ器形ト創形トヲ比較シ、

第二、搜器ヲ以テ探リ、

第三、創内ニ温湯ヲ灌射シ、直ニ出、與不出ヲ察シ、

第四、呼吸ニテ肺臟ヨリ、氣ノ鳴テ出、與不出ニテ察シ、

第五、内部毀傷ノ證候ヲ見ハス變證ヲ察シ、

第六、凡ソ是等ノ診察ヲ為ニハ、患者ヲメ創ヲ受タル時

ノ貌ニ居シメテ觀察思惟スベシ、

第六章 胸膜マテ貫ク創ヲ論ス

凡ソ創胸膜マテ貫イテ全ク内部ニ貫カザル者モ亦汚血
或ハ外氣ヲメ胸膜ノ囊内ニ留滞セシムルハ全ク内ニ
貫透スル創ト異ナルヲナシ○是等ノ證ヲ察知スルニハ
前章ヲ照メ論シ、並ニ強ク吸息ヲ為サシメテ知ルベシ假
令創口閉メ有ト雖モ呼息ニテ氣血カ創口ヨリ出ルキハ
内部ニ貫クヲ諦カ也、又其部胞腫メ之ヲ按スレバ消シ、或
ハ聲ヲ發シ、或又呼吸シ難キ等ノ變證ヲ發スベシ、

第七章 治法ヲ論ス

胸膜ノ囊内ニ汚血溜リ、或ハ外氣襲入テ膨脹スルキハ、醫
勉テ之ヲ除カスンバ有ベカラズ、即其法

第一、患者ヲメ俯サシメ創部ヲ卑低ナラシメ、以テ瀦滯
ノ汚血ヲ倒出セシムベシ、

第二、K圖ノ拔氣硝子又ハ拔氣銃ヲ具タル吸硝子ヲ以
テ氣血ヲ吸取ベシ、譯者曰 若無此

器則以水
銃亦可也

第三、創口ヲ閉テ患者ニ強

ク吸息ヲ為サシメ、而メ強ク呼息ヲ為シムル時ニ於テ、
創口ヲ開クベシ、如此スルヲ數次、以テ氣ヲ除キ出スベシ、

圖 K



凡ソ如此創ニ於テハ、縫術ヲ施スヲ稀ニメ、唯創口ハ外氣ノ襲入サル様ニ一膜ヲ以テ創口ヲ覆フベシ、

第八章 内ニ貫ク創ヲ論ス

此創ハ汚血内ニ瀦溜シ、外氣内ニ襲入り、又臟腑毀傷スル類也、

第九章 證候ヲ論ス

蓋シ胸創ノ内部ニ全ク貫ク者ハ、其證候

第一、呼吸次第ニ促迫シ、遂ニ患者、其身ヲ直立セザレバ呼吸シ難キニ至ル、

第二、仰卧セザレバ患者不安者アリ、或ハ患者創部ヲ卑

低シ居ハ呼吸シ易キ者モアリ、

第三、患者胸ニ沈重ヲ覺エ、且喘鳴ヲ發スル者アリ、

第四、顔面痿蒼ニ變シ、頰ニ惡寒シテ虚脱スルアリ、

第五、諸證蜂起メ速ニ死ニ瀕リシ、且呼吸ニ隨テ創口ヨ

リ氣息往來シ、血沫ヲ出ス者アリ、

第六、試ニ温湯ヲ射入スルニ、再ニ不出モノ也、

第七、其創傷シタル器形ト創形ト相比準スル者等也、

第十章 治法ヲ論ス

内部ニ貫ク創ハ、内ニ溜ル汚血ヲ除去ルヲ一大義トス、即

第七章ノ法ニ隨テ驅除スベシ、然レ血既ニ凝固シタル

者ハ、柔ナル溶解劑方出于骨ヲ水銃ニテ射入シ、其血ヲ稀
渙ナラシメ而後扶出スベシ、譯者曰、腔内汚血不速
除、則患者必上鬼録也。

第一柔溶水

人乳十六
錢 雞子白四
錢

右混和供用

若、創口甚窄、利刀ヲ以テ謹慎シテ一擧ニ切開ヘシ、創
若、胸ノ上邊ニ在テ、下ニ溢流シタル血、第七章ニ擧ル法ニ
テ不可除者ハ、醫危機ヲ踏テ新ニ其下邊ニ利刀ヲ以テ一
孔ヲ穿テ、以テ其血ヲ扶出スベシ、譯者曰、非明士折匠則
恐不得處此術矣。○
若、胸臟毀傷ヲ受テ、創外ニ突出シタル者ハ、其創部ヲメ創

唇ニ挿ミ、ニ愈著セシムヘシ、譯者曰、與腸創如此創ハ必
之、治術無異矣。

其口ニ撒糸ヲ含シテ速ニ愈著セサラシムヘシ、而メ創口
ヨリ外氣ノ襲入ザル様ニ用心メ縛スヘシ、然レ氏、胸創ハ
繃縛スヘキ者殊ニ稀也、又術ヲ處スル間モ風骨疽部ニ擧
ル止腐發汗劑、及潤肺湯ヲ證ニ隨テ撰ヒ與フヘシ、

潤肺湯

罌粟子十六
錢 蒔蘿根二十
錢 罌粟花六
錢 冬葵一
握
右以白水適宜煮取其半而温服每半時一盞

第十一章 腹創ヲ論ス

腹創ハ三種ニ區別ス、一、内部ニ不貫者、二、内部ニ貫ク

者、三ニ内臓ニ波及スル者、

第十二章 内部ニ不貫刺ヲ論ス
蓋シ腹刺ノ内ニ不貫者ハ、第九章ニ擧ル所ノ法ニ隨テ知
ヘシ、都テ此治法ハ唯膏術ヲ以テシ、刺上ニハ鎮布ヲ置キ、
腹縛帶ニテ緊縛シ、腹疝ヲメ發セザラシムベシ、

第十三章 内部ニ貫ク小刺ヲ論ス

此刺ノ鑿定ハ第九章ノ法及刺口ノ流液ニテ察シ知ヘシ、
又、刺臍臍ニ波及スト否サルトハ、温湯ヲ刺内ニ注射シテ、
其液不變メ再出與不出ニテ知ヘシ、若臍臍不脱出メ刺不
甚大片ハ、唯夫ノ内ニ不貫刺ノ治法ニ隨テ縋縛スヘシ、但

其刺口ニ圍メタル撒糸ヲ押ニ愈着ヲ速ナラシメズ、勉テ
刺液ヲ外ニ導キ腹内ニ浸入セサラシムヘシ、
譯者曰、撒糸
衆製為良矣

第十四章 内部ニ貫ク大刺ヲ論ス

内ニ貫キタル大刺ハ、爰メ膏術ノ能合閉スル所ニ非ズ、宜
ク一糸兩鍼ノ縫術ヲ施スベシ、鍼ハ強剛ニメ曲リ、兩及ナ
ル者ヲ用フベシ、而メ術ヲ施ス片糸ノ兩緒ニ各此鍼ヲ附、
其一鍼ヲ取テ一方ノ刺唇ノ内部ニ刺メ其外部ニ通過シ、
又他鍼ヲ取テ他唇ニ刺メ始ノ如シ、刺唇ヲ按合シ、糸ヲ
結定スルヲ結縫術ノ如スベシ、但此刺ニ於テ、鍼ヲ刺メ宜
ク刺内ヲ探驗シテ、其筋臍俱ニ貫クベキ處ニ於テシ、鍼鋒

ヲ突出スルコトハ、宜ク割口ヲ距^レ一、拇指横徑ノ處ニ於テ
スヘシ、然メ兩唇内外ノ鍼口同位ナランコトヲ要ス、若シ毫モ
齟齬スル片ハ、割唇合閉スルノ時ニ至テ^{ヒキツリ}徧牽ノ害アリ、宜
ク疎漏ナルベカラズ、割最大ニメ一縷ノ合閉スルニ堪ザ
ルコトヲ知ラバ、糸ヲ二條ニメ仍兩鍼ノ枕縫術ヲ以スベシ、
而メ鍼ヲ刺ノ法、上ノ説ニ隨^レベク、糸ヲ結定スルコトハ枕縫
術ノ法ニ隨^レベシ、縫結ノ業卒テ後必須、硬膏腹縛帶^{五指徑}
^{或六指}者ニテ割口ヲ抱持スベシ、然メ都テ如此割ニ於テハ、其割
口ノ下邊ニ撒糸ヲ挿テ割液ヲ外ニ導^レコトヲ要ス、故ニ固ヨ
リ宜ク患者ヲメ毎起臥ニ割口ヲ卑低ナラシメ割液ノ自^ラ

流出ニ便ナラシムベシ、其縛貼ヲ更ル時ニ當テハ、最意ヲ
此ニ盡スヘシ、割液若内部ニ浸入スレバ、必變ヲ生メ切ヲ
誤ル者也、故ニ是ヲ防グヲ此割治療ノ第一義トス、

第十五章 脫腸ヲ論ス

蓋シ腹割巨大ニメ腸脫出スル者ハ、速ニ納ムルヲ良トス、
若シ術ヲ處スルコト甚遲滯シ、腸既ニ冷痺スル片ハ、第一柔^和
蒸劑^{方出于第十七章}ヲ以テ之ヲ温和シ、而後納ムベシ、若シ腸既ニ
死シタル處アル者ハ、必之ヲ直ニ納ムベカラズ、宜^ク其死部
ヲ剪去リ、而メ之ヲ納メ、其新割ノ處腹皮ノ割口ト愈着ヲ
共ニセシムベシ、若シ又約腸死シタル者ハ、醫須ク糸術ニテ

之ヲ切ヘシ、脱腸若、僅ニ毀傷ヲ受テ、譯者曰傷腸則其割小其部必痿痺矣筆管ヨリ稍、寬キモノハ、創口ト俱ニ合閉メ愈着セシムヘシ、若、腸全ク横斷シタル者ハ、其兩端ヲ合セ、結縫術ヲ以テ外創ト俱ニ愈着セシムベシ○總テ大創ハ、一方ノ腸ヲ納ントスル間ニ他ノ一方ノ腸續テ脱出スルコトアリ、不可愈也、腸若不脱メ唯毀傷シタル者ハ、醫勉テ其創處ヲ探リ索メ、外創ト俱ニ愈着セシムベシ、若、之ヲ棄置メ唯外創ノミヲ直ニ愈ス片ハ、患者終ニ斃ル、者也、不可不察也、凡、臟腑ノ創ハ外創ト俱ニ附着シ縫サレハ、必愈着セスト知ベシ、

第十六章 納腸シ難キ創ヲ論ス

創口甚夕餘地無メ、納腸シ難キ片ハ、其創若、下腹ニ在者ハ上方エ切開キ、其創上腹ニ在者ハ下方エ切開テ口ヲ寬ムベシ、而メ此術ヲ施ニ方テ、最モ心意ヲ注、ベキコトアリ、直筋下ニ循ル動靜脈、並ニ白色ノ溝渠アリ、是ヲ傷ラサランコトヲ要スベシ、其方若、創口ノ右ヲ切開、ントスル片ハ、先、其脱腸ヲ左ニ退ケ、柔和蒸劑ヲ腸上ニアテ、其冷枯ヲ防キ、而後醫宜ク創口ヲ按定シ、挿器ノ渠ヲ創偏ノ右ニ入、探テ腹膜ノ下ニ至ラシメ、利鋏或利刀ヲ其渠中ニ沿、入テ切開、ベシ、或渠挿ヲ不用片ハ、唯其鋒尖ヲス、圓核ヲ冒リタル衝傷ノ慮ナキ、彎刀ヲ執テ切開、モ可也、若、創口甚夕餘地無メ、彎刀及

渠挿モ不可入者ハ先腸ヲ退ク法ノ如クニメ腹皮ヨリ切テ
數次ニメ腹膜ニ至リ而メ腹膜ヲ切ニ至テ最謹慎ヲ加テ
過無ランコトヲ要スヘシ既ニ割口ヲ寛開メ納腸スルノ時
ニ至テ若ク腸ニ穢物或ハ風氣ヲ含マハ柔和蒸劑ノカヲ借
手術ヲ盡メ徐々ニ之ヲ驅除シ而後納ムヘシ不可謾侮也

第十七章 臍腸綱ヲ論ス

若ク臍綱猶温ニメ柔ナラハ直ニ之ヲ納ムベシ既ニ冷痺シ
タル者ハ須蒸劑ヲ處メ温和シ而後納ムベシ若ク其色蒼黑
ニ變メ其狀臍疽ノ如クナリタル處アラハ其處ヲ切除ヘシ
然メ腸綱ニハ諸脈アルカ故ニ是ヲ切テ不宜倉卒也之ヲ

截ニ法アリ須其痔括シタル部ヲ界リテ稍良ナル處ニ糸
ヲ以テ緊扎シ而後利刀ヲ以テ其痔括ノ處ヲ截去ヘシ但
糸ハ蠟糸ヲ用ヒ鍼ヲ着テ二重ニシ夫ノ界ニ鍼ヲ刺過シ鍼
ヲ去リ糸ヲ留メ其糸ヲ以テ纏環三四回シテ束定スベシ
而メ其糸ノ餘緒ヲ割外ニ垂出シ五六日ヲ經テ膿ヲ釀シ
糸弛緩スルヲ俟テ徐々ニ糸ヲ取出シ而後割口ヲ愈着セ
シムベシ而メ又割口ノ下邊ニ撒糸ヲ挿シ斂テ膿ヲ導出ス
ベシ而メ此撒糸モ糸ニテ結ヒ餘緒ヲ割外ニ垂ベシ凡ク此
割ニハ割外ニ糸ノ餘緒多垂各其用ヲ異ニス此故ニ其糸
ノ色ヲ分用ベシ然ラサレハ錯紊メ事ヲ謬ルコトアリ又割

液腹内ニ入テ自ラ裏急後重シ、下利スルコトアリ、不可不知也、

第十八章 臟腑ノ創ヲ論ス

創腹内ニ貫ク者ト雖、必皆臟腑ヲ傷ラス唯腸ハ殊ニ切傷ヲ受ルコト稀ニメ、其位置ヲ錯亂スルコトハ多ト會得スヘシ、而ルニ若之ヲ毀傷シタル者ハ即患者發熱、炊痛、息迫メ身蒼色ニ變シ、汗出眩暈シ、又創口ヨリ食物、乳糜、尿尿等出ラ以テ其傷ヲ受ル臟腑ノ區別ハ徵スヘシ、如此證ハ醫預、其治不治ヲ決スルコト能ハス、唯其命ニ委任メ其幸ヲ俟ヘシ、何者、此創術ヲ施ニ途無レハ也、

第十九章 問答篇

問曰、腹創ノ諸惡證ハ皆俱ニ臟腑ノ毀傷ニ由テ發スル者ナリヤ、

答曰、凡臟腑毀傷ヲ受レバ其官能便廢ス、其官能廢スレハ變證發ルコトニメ足ラズ、故ニ其變證ト稱スル者、皆是正證ニメ其實ハ變證ニ非ズ、所謂莫ノ變證ナル者三アリ、一曰、腹皮創傷ヲ受ルニ由テ其内臟ヲ鎮約スルノ力廢レ、以テ危篤ヲ致ス者、二曰、風氣創口ヨリ襲入者、三曰、創液臟腑ニ浸淫シ、或ハ其液腐敗メ諸惡證ヲ發スル者、宜ク唯此三ノ者ヲ變證ト稱スベシ、

ト斗リ...

問曰、凡ノ腹割ノ人ニハ餐食ノ養如何メ宜キヤ、

答曰、凡ノ食物其宜ヲ得レバ運化修補ノ功ヲ助クト雖甚
過飽スル片ハ、臟腑之カ為、ニ壓迫セラレ、其間ニ汚物停
滯ス、故ニ過飽ヲ禁、且消化シ易メ大便秘セス又利セサ
ル物ヲ與ヘシ、

問曰、捨割ト切割トハ如何ノ區別アリヤ、

答曰、兩割共ニ利器ニテ為ト雖、捨割ヲ重シトス、其故何ソ
ヤ、捨割ハ其口不閉メ出血少キカ故ニ、種々ノ變證ヲ發
ス、故ニ醫勉テ一危地ニ入テ、其割ヲ再切開ヘキコアリ、
切割ハ不然、

問曰、特リ神經腱ノ捨傷ハ他部ノ捨傷ヨリハ如何ノ理ニ
テ危険ナリヤ、

答曰、凡ソ神經腱ヲ捨傷スル者ハ、其傷小ナリト雖動モス
レバ劇痛痙攣ヲ發ス、故ニ險也、又其之ヲ切傷スル者ハ、
纖維脈絡ヲ全ク切斷スルヲ以テ、劇痛痙攣ヲ發スルノ
カヲ奪ニ由テ平也、蓋シ捨割ノ劇痛ヲ發スル所以ノ者
ハ、割液流出セス以テ漸次ニ溜止シ、漸ク其部ヲ壓迫シ、
其液不流動、日ヲ經テ腐敗シ、隨テ苛烈ニ變シ、以テ神經
ヲ刺觸メ劇痛ヲ發スル者也、又痙攣ヲ發スル所以ノ者
ハ、苛液大ニ神經莖ニ浸淫シテ、類ニ之ヲ笑觸ス、因テ莖

其苛液ヲメ、神經ノ本體ニ強ク觸レザラシメンガ為、ニ之ヲ驅出セントシテ、擧急スル者ナリ、

爛傷部

第一章 爛傷ヲ論ス

凡、層剥落シテ

層所以剥落者、蓋其層腠相附續之脈絡傷碎也、

腠露ル、者ヲ爛傷

ト名ク、蓋シ此因四種アリ、以テ不可不詳也、一、摩盪ヨリ起リ、二、外蝕ヨリ起リ、三、内蝕ヨリ起リ、四、死肉ヨリ起ル、

第二章 摩盪ヨリ起ル者ヲ論ス

遠行若クハ乘馬ノ類ハ、其強ク鞍履ニ觸ル、部ヲメ、摩傷セシム、蓋、人體與物相摩スレバ、焮熱紅腫シ、隨テ血斑ヲ為

シ終ニ爛傷スル也、又大汗出テ遂ニ此患ヲ發スルコトアリ、而メ爛傷ノ部ハ知覺銳敏ニメ風氣ニモ不可觸也、○然レ、凡類ニ摩メ不止キハ、腠其痛ニ勝ズ、命之カ為、ニ妙働メ、自、頑皮ヲ生ズルニ至ル、是爛傷ノ摩盪ヨリスル者ハ治シ易メ、床瘡ノ類ヨリスル者ハ治シ難キ所以也、

第三章 治法ヲ論ス

治法ハ其摩盪スル所以ノ者ヲ除、ト其傷ヲ愈スノニ、ニ過ズ、故ニ第一、柔和軟膏、出于剝部或造層劑ヲ以テ可防其傷、

第一造層軟膏

牛酪無塩者 浮石適宜

右調勻、塗西洋布以貼患上、譯者曰、若無牛酪則以巴且杏油、或膽八油代之亦可也、

若此患稍重、煨痛スル者ハ可處涼煨劑、

第一涼煨軟膏

金密陀八

薑油榨

罌粟油仁榨汁

薔薇油三

右調勻供用

第二方

巴埵根適

右搗爛如泥、以貼于患上○若爛傷甚腫起則宜撰用柔和

諸劑方出于骨病部

柔和蒸劑

羊蹄葉三

清水適

右煮如粥加蜜八十錢、醋三十錢、大麥粉適宜、温以覆患上、

是等ノ諸劑ハ煨痛ヲ止、瘡痂ヲメ發セザラシムルノ方也、

○若水胞スル片ハ速ニ破水スベシ、否ラザレバ水不流漸ク

腐敗メ苛液ニ變シ、其部ニ浸滲スレバ也、○若層已ニ除去

片ハ其痛苦ニ堪ザルガ故ニ柔和劑ヲ西洋布ニ塗テ貼ス

ベシ、而メ縛帶ヲ更ルヲ屢スベカラズ、

第二柔和軟膏

第一方出于剝部

荳々菜油

萍蓬各十

生牛酪

青花仁

液汁各

薔薇油四

樟腦一

右混和供用

第三方

使君子油

甘巴且杏油

鉛白砂各一

右同上

摩傷時日ヲ經テ既ニ瘡痂ヲ結タル者ハ其痂ヲ柔刷劑或

柔和洗劑蒸劑方出于骨病部ニテ洗去ベシ

柔和糊劑

羊蹄菜

鶴兒列草各二

雪吉兒夫德草

董々

菜各一

白屈菜半握水適宜

右煮如粥和大麥粉適宜醋三十二錢以為糊劑

第四章

外蝕ヨリ起ル者ヲ論ス

是ハ層苛液或蝕藥或發泡劑ノ為ニ浸蝕セラレテ爛傷ヲ發スル者也宜先初ニ其苛液ヲ柔ナル洗劑ニテ洗去而後其爛傷ヲ治スベシ

第一淨爛水

乳汁通宜去膜

右洗濯患處

第二方

車前葉生汁

乙切草精各十

薔薇酪十六

右混和供用

譯者按乙切草雖稍似西洋之產者乎不全同也

第五章 内蝕ヨリ起ル者ヲ論ス

是ハ皮膚ニ膏ノ類ヲ貼メ、苛液蒸發ノ道路ヲ障遏シテ其液層間ニ流入テ蝕爛スル者也、凡テ脂狀ノ諸膏ヲ貼スレバ速ニ其部ニ暖氣赤色痒觸ヲ生シ、隨テ粟粒ノ如キ者ヲ發シ、竟ニ爛傷ニ至ル、凡ソ此等ノ證ハ、須其貼物ヲ剥去リ、其部ニ柔和塗劑ヲ塗り、或淨爛水出前于ヲ以テ洗滌シ、或收水出前于等ヲ撰用テ少ク收斂スベシ、若舊ヨリ貼シタル膏劑剥去ベカラサル者ハ、須爛傷ヲ防グノ涼燉軟膏、第二柔和軟膏方俱出前于收水出前于ノ類ヲ撰貼スベシ

防爛水

- 薔薇油
- 薔薇露
- 薔薇醋
- 車前水 各十

防爛泥

- 伏龍肝 二
- 好酒 精者適宜

右混和塗棉布貼患處

又汗尿浸淫メ起ル者アリ、又瘍疽ノ敗液浸淫メ起ル者アリ、是等ハ止腐洗劑方出于骨病部、柔和軟膏、硬膏、泥劑方出于關節剛強部ノ類ヲ貼スベシ

吸酸塗劑

- 牡蠣 四
- 膽八油 適宜

右混和照前供用

第六章 死肉ヨリ發スル者ヲ論ス

蓋シ爛傷ノ死肉ヨリ起ル者ハ前法ノ非所可能治是其部ニ運動ヲ催進センコトヲ要ス治法與乾脫疽同シ

打撲部

第一章 打撲ヲ論ス

打撲也者物體ノ頓ニ觸テ身體ヲ折傷スルノ謂也

第二章 打撲ノ證候ヲ論ス

凡打撲ハ細脈、纖維、打傷メ其血皮内ニ泛流スル者也、是故ニ初ハ層ニ蒼色ヲ發シ其汚血漸クニ消散スレバ紫色ニ

ナリ、終ニ黄色ニ至テ全ク散シ而メ皮膚枯脫スル者也、但此等ノ證ハ其輕者也、其重者ハ敗瘍ニ變ス

第三章 患部ニ隨テ其證候ノ異ヲ論ス

打撲モ亦創ノ如ク其患處ニ隨テ種々ノ證ヲ發ス故ニ其患者ノ輕重モ、創ノ如ク各區別シテ不可不論也

第一、打撲大動脈則發動血瘤譯者曰、動血瘤者、謂血瘤之有動者

第二、關節ヲ強ク打撲メ摧碎スル片ハ脫疽ニ變ス

第三、腺ヲ打撲スレバ、硬腫メ或ハ痛腫ニ變ス

第四、骨ヲ打撲スレバ或ハ骨疽ニ變ス

第五、筋ヲ強ク打撲スル片ハ其部或屈曲シ或剛強ス

第六、神經ヲ打撲スレバ靈液ノ注流ヲ障止シテ麻痺或
劇痛ヲ發ス

第七、腱ヲ打撲スルキハ其部剛強シ、或結核ヲ為ス、

第八、臟腑ヲ打撲スルキハ其臟腑ノ官能ニ隨テ其證雖

不同或脫疽ニ變シ或敗瘍トナリテ終ニ患者鬼録ニ上

ル者也、譯者曰、凡為醫者、不審臟腑之官能則不能應其變而施治也、生象學之於醫事不亦大乎、故ニ

胸腹ヲ打撲スルキハ多ハ死ニ至ル者也、

第四章 打撲ヲ診察スルコトヲ論ス

凡ソ打撲ノ所在ヲ知ラント欲セバ、

第一、物體ノ身體ニ觸タル勢狀ヲ察シ、○又其部ノ變色

ヲ察シ、

第二、患者必其部ニ疼痛、若クハ麻痺、若クハ沉重ヲ覺エ

若クハ其部不可動等ニテ知リ、或ハ耳、鼻、咽、前陰、後陰、等

ヨリ出血スル類ニテ知レシ、

第五章 治法ヲ論ス

此治法ハ消散スルヲ法則トス、然レ凡其勢不可消散者ハ

速ニ催膿スベシ是脫疽ニ至ランコトヲ恐テ也、若夫ノ劇證

ニ至テハ、間其部ヲ切斷スベキコトアリ、○凡ソ之ヲ消散セ

ント欲セバ、汚血ヲ散シ、並ニ其纖維ヲ緊縮セシメザルコ

ト要スベシ、故ニ骨部ニ載ル柔和糊劑、及第二、第三ノ柔和

軟膏ヲ温メ貼スベシ

第四柔和軟膏

生牛酪十六 百合油白者 四 大麥粉十二 槓楂實 汁

猪脂精者各 八 甘巴且杏油四 白蠟適 宜

右混和塗木棉温以敷于患上

若腺ノ多キ部ヲ打撲メ甚硬腫シタル片ハ消散スベシ

第一消散泥

蚕豆粉四十 八 清水適 宜

右煮熟加蜜醋二十四錢照前供用

此證ハ刺絡下劑ヲ兼用スベシ是其部ノ充實ヲ疏滌シ且

凝液ヲメ靜脈端ヨリ吸納セシメ且焮痛ヲ防カンガ為也

抑焮湯

甘露蜜二十 酪剩澄水百九十 三 香澄汁少

右相和每半時飲服一椀

抑焮散

暗厄利亞塩二 白糖一 薺薺油四

右相和分為三晝二夜一服盡焉

此證ハ患者ニ肉食ヲ與ベカラス是腐敗ヲ防カンガ為也

故ニ唯苜蓿酸、牛房芥菜刺的、烏別逸得顯缺耳根等ノ野

菜ヲ與ベシ、譯者曰與清淨血

第六章 打撲ノ膿潰スル者ヲ論ス

若、劇キ打撲ニ因テ脈絡大ニ損傷メ不可消散_レヲ診得セ
バ、速ニ膿潰セシムルヲ良トス、即第一神經剝脂_{出テ}及催
膿劑ヲ撰用ベシ、

催膿蒸

艾藍 煮爛者九
十六錢

蜂蜜 二十
四錢

右温蒸患處

催膿膏

松香 三十
二錢 雞子黃 八
箇

右相和而後加黃蠟十六錢、七切草油三錢、

若、患處瘡痂ヲ結テ其痂既ニ死タル者ハ、刀ヲ取テ徐ニ劈
痕ヲナシ、疎刷水、及創脂ヲ撰テ、之ヲ洗淨シ、而後前章ノ諸
膏ヲ撰塗ベシ、

止腐水

芸香

臭香

胡蒜麥

冬葵

各青葉
二握

清水

適
宜

右煮滌過、去滓、收取煎汁百九十二錢、加石鹼 勿擲釋
一錢

燒酎六錢

右ノ諸劑ニテ速ニ膿ヲ釀スベシ然、凡打撲最重ク疼痛モ
亦劇キ者ハ、鎮痛劑ヲ内外ヨリ處シ、又柔_和泥ヲ處スベシ、
穩痛泥

底力面油四 雞子黃一 撲彪列逸軟膏

右混和供用

穩痛飲

撒敷撒掬示樹根 土木香 蕁麻根各六 石

龍膽花握 杜松子二 蕁麻子四 大黃六 令舌蒲

萄酒二百八十

右日煮收貯、毎半時服二三匕、

第七章 打撲ノ脱疽ニ變スルヲ論ス

若骨節ヲ強ク打撲メ、其勢不可治メ、竟ニ脱疽ニ變スルヲ了解セバ、醫慎誠ヲ加テ鑑定シ、速ニ其部ヲ切斷スベシ、

若手足其骨細碎シタル者ニ於テ、醫在苒トメ日月ヲ送ル、片ハ患者ヲメ徒ニ困苦セシメテ終ニ死ニ就シム、故ニ醫必先其初ニ武斷ノ見ヲ以テ患部ヲ切斷スベシ、

第八章 問答篇

問曰、刺蝟石、野牛乾血、赤珊瑚、鯨腦髓、別弄示物也、説兒没母ノ類ハ、古ヨリ打撲ノ奇劑ト稱ス、實ニ其性アリヤ、

答曰、凡ソ此等ノ品、古ヨリ世人嘖々トメ奇藥ト稱スト、雖實ハ不然、予以為古昔偶爾トメ是ヲ用ヒ、幸ニ其患除キタルヲ以テ、奇効アリトスルモノ歟、蓋打撲ハ皆外傷ニメ、素ヨリ内ヨリ醸セル患ニ非ザレバ、假令治療ヲ施サ

サレ氏命ノ妙勳ニテ自^レ治スル者アリ、若^レ野牛乾血一錢ヲ用テ世ノ口實ノ如^ク切アラバ直^ニ其鮮血ヲ取テ肉ト共ニ之ヲ食ハ、其効十倍スベシ、凡^レ此等虫々タル闇盲ノ流言、明哲ノ士、豈肯^テ足掛諸齒牙哉、

問曰、打撲ノ重證ハ其汚血敗液ヲ消散セシメンガ為^ニ收斂劑ヲ處スベキ理アリヤ、

答曰、古人嘗^テ所以處收斂劑者ハ、汚血敗液其部ニ聚滯メ、腫痛ヲ發スト論定スルヲ以テ也、予ガ論ハ不然、蓋シ其重證ハ其部ノ脈絡纖維悉ク摧折メ、順流ノ血液之カ為^ニ窒塞セラレ、以テ腫起ヲ為^ス者也、是ヲ以テ重證ニ收斂劑

ヲ處スル片ハ、其摧折シタル脈絡纖維愈緊縮シ、其部ノ血液モ愈凝固シ、反テ其弊ヲ招クニ至ル、豈可不察哉、譯者

曰、打撲之輕者或可處收斂劑也、若夫重者處之取害不少也、蓋其重者以脈絡破碎也、其輕者以脈絡弛緩也、

問曰、打撲ノ腫起ハ、冷物ヲ以テ靡消スベキヤ、

答曰、此法ハ唯小兒其頭ヲ墜撲シタル片ノミニ處メ、其他之ヲ用ヒズ、是蓋其折傷シタル脈絡ヲメ愈緊縮セシメ、瘀血ヲメ管ニ凝固セシムル而已ナラス、更ニ其部ノ運^行ヲメ障止セシムレバ也、

問曰、打撲ハ勳モスレバ敗瘍ニ變シ易シ、其理何ゾヤ、

答曰、打撲ノ敗瘍ニ變シ易キ所以ハ、蓋其患處ノ脈絡半破

裂シテ諸液ヲメ、脈外ニ漏泄セシメ、此液竟ニ腐敗メ脈
絡ヲ壞クサス類スルニ至レバ也、

窮理外科則卷之中終

